Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

016

保育素材としての土粘土について

―野焼きまでの実践を通しての考察―

佐藤智朗
（山口芸術短期大学）

1．目的

土粘土は、自然の素材であり、高い可塑性を持っている。また、水との割合によって、固さが変わり、肌触りや手応えもさまざまに変化するし、焼くことによって、飾ったり、道具として使ったりすることができるようになる。さらに、道具を必要とせずに、直接手や体を使ってあそぶことができるといった、すばらしい保育素材である。心理学的にも、その効果は高いといわれている。

しかし、ほとんどの保育現場では、土粘土が使用されていないのが現状である。その理由としては、次のようなものが考えられる。

①彫塑教育の研究が、立ち遅れていること（土粘土の重要性の認識の普及が不十分である）

②保育教材が、豊富でかつ手軽になったこと（土粘土は、準備や後始末、管理等が大変である）

③保育内容が、多種多様化して、ゆっくりと時間をかける余裕がなくなったこと（土粘土の教育的効果が、現われるのには時間がかかる）

④作品・結果主義的な大人の価値観から、プロセスへの関心が、薄くなってきたこと（土粘土は、作品として残しにくい）

⑤道具を使って表現することは、文明的で価値が高く直接手や体を使って表現することは、原始的で価値が低いという見方があること（土粘土は、道具を原則的に必要とせず、手や体を使って表現する）

もちろん、保育の中に、土粘土を取り入れたいと考えている保育現場も少くない。しかし、指導者の経験不足から、消極的なものになってしまっている。

自然環境からの隔離が進み、泥あそびや水あそびの経験を持たずに、幼稚園・保育所に入ってくる子どもが増えてきている現状や、画一的で個性に乏しい子どもが増えてきている現状などを見ると、人工的な素材や、画一的な素材では、子どもたちに創造的なあそびを作り出させ、健全な心身を育むことはできなくなるのではないだろうか。土粘土の果たす役割りは、増々大きくなっていくと考えられる。そこで、保育現場に土粘土を持ち込み、泥んこあそびから、野焼きによるテラコッタ作りまで、保育実践を行ない、子どもたちの反応を見た。それによって、保育素材としての土粘土の実践方法や効果などを考察し、保育現場への普及に役立てていく。

2．方法

山口市内の公立A保育園の2才児9名、3才児11名4才児9名、5才児10名、計39名を対象として、昭和62年7月から11月にかけて、11回に渡って保育実践を行なった。但し、4・5才児については、昭和61年7月から9月にかけて、9回に渡って粘土あそび（泥んこあそびを中心としたもの）を経験している。2才児から5才児まで、同一の場所で一緒に行ない、内容を途中から変更した。園庭にビニールシート（2.7m×3.6mを2枚）敷いて7回目までは行ない、8～10回は、机を園庭に出して行なった。保母は、指導者という立場ではなく、子どもと一緒に遊んで、子どもの活動に共感するという立場に立っていただいた。

〈活動の流れ〉2～5才共通

1～3回　泥んこあそび・土粘土練り

4～6回　基本的な活動（丸める・伸す・広げるなど）

	2～3才	4～5才
7～8回	粘土いじり	型押し（皿作り）
9回	型押し（手型）	ひっかき絵・型抜き
10回	――	立体表現（人・動物）
11回	野焼き（見学）	野焼き（参加）

7回目までは、彫塑用粘土を使用し、8回目以降はテラコッタ粘土を使用した。また、8回目以降は、制作物は壊さず、乾燥させた。

3．結果

土粘土あそびをすでに経験している4・5才児は、土粘土の特性や、それを使ったあそびを知っているので、始めからダイナミックさ（全身で土粘土の山にぶっかっていく）が感じられた。型押しや型抜き、ひっかき絵といった新しい試みにも、興味を持って取り組んでいた。また、立体的な人や動物といったものも、ひねり出したり、くっつけたりして作っていた。大雑把で、見た目を気にせずに作っているため、野焼きを行っても、ほとんど割れなかった。

今回、始めて土粘土を経験した2・3才児の中には土粘土を見ただけで、嗅いとか、きたないとか見た目

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

で判断をして触ろうとしない子どもや，触ってもすぐ手を洗いにいく子どもが数名いた。（他の子どもに影響されたり，水あそびなど他への興味が強かった子どももいる）しかし，保母の言葉掛けや，他の子どもからの刺激などにより，徐々に自ら土粘土に触れることができるようになった。活動内容としては，丸める・伸ばす・広げることが，大きな塊からでは難しく，手の掌に入る位の量から行なわないと無理であった。全般的に，土粘土いじりが主となった。しかし，型押しには，興味を示した。2・3才児の特徴としては，保母への依存度が高く，作ったものを，その都度見せに来たり，「へ作って」と言って来る子どもが多く見られた。

子どもたちは，一生懸命作ったものには，当然のことながら愛着を感じ，壊したくないという気持ちを，強く持っている。野焼きをするために，できたものを残すようになると，一層はりきっていろいろなものを制作するようになった。また，乾燥させている段階でも，作ったものへの関心は強く，「これは私の～」とか「～ちゃんの」と言って来る子どもが多かった。

野焼きは，保育園の近くの田んぼを借りて行なった。始めから子どもたちに参加させたので，煙や灰にまみれながらも，喜んで見守ることができた。次の日の夕方，焼け落ちた，ワラやすくもの中から，自分の作ったものが出てきたときには，驚きを示し，また満足げな顔をした。

子どもたちの反応や変化は，すぐに判断すべきものではない。しかし，少くとも，野焼きまでの一連の活動の中で，これまでに味わったことのない喜びや楽しさ，満足感を味わってくれたのではないかと考える。

4．考察

(1)土粘土を使った活動（あそび）の流れとその意味

①泥んこあそび

体験を通して，土粘土の持つ特性について知ることができる。

②土粘土の採集

自らが自然の中から見つけ出した喜びで，土粘土に対する興味・関心を強く持つことができる。

③土粘土を練る

足腰や手，指の力を強め，粘土の扱いに慣れることができる。また，含まれる水の量により，土粘土が多様に変化することを，知ることができる。

④土粘土いじり

触覚で楽しむことで，立体制作の基礎的なものを養うことができる。また，扱える量も増していける。

⑤基本的な活動を取り入れた土粘土あそび

量を増したり，減したり，変形させたりすることで，立体制作に必要な技術を身に付けることができる。

⑥立体的表現

絵画では味わえない表現や，大胆な表現ができる。また，協同制作などもできる。

⑦野焼き

野焼きを前提とすることで，制作への目標付けや，意欲付けができる。原始的な焼き方により日常使っている茶わんなどに興味が持てるようになる。

(2)指導上の留意点

①結果をあせらずに，上記①～⑤までの活動をじっくりと行なうこと。

②自由放任にするのではなく，技術面や題材面など刺激となるような指導・助言を行ない，子どもに発見させたり，目標を持たせたりすること。

③道具はあくまでも二次的なものとし，手や体を使って活動させること。

④準備・後始末も，子どもたちの活動として行なうこと。

⑤5才児であっても，始めて土粘土を使用する場合は，すぐに立体表現を要求するのではなく，最初の段階から，ゆっくりと行なうこと

⑥評価は，プロセスを大切にして，できたものに対しては，見栄えではなく，量感や大きさ，大胆で素朴な作り方などを認めてやること。

5．今後の課題

より多くの具体的な実践や調査を行ない，よりよい保育形態や具体的な指導方法を考えていきたい。その中でも，短時間に大胆で量感のあるものができるという，ひねり出しの技法が，子ども達にどの位できるかという点と，野焼きの効果や，焼き方，子ども達の参加の割合（役割り）をどれだけ増せれるか，どのような題材が，野焼きにはむいているのかという点を中心に研究して行きたい。また，現職教育としての，土粘土の公開講座や，保育者養成としての大学の授業での土粘土の内容などを通して，保育現場への普及も計って行きたい。

NII-Electronic Library Service